

# スーパーロボット大戦 V～次元を渡る者達～

ジンオウガ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

三日月・オーガスは火星で最後を遂げた。しかし、彼が目覚めると見知らぬ施設にいた。そこで一人の青年と出会う。彼もとあるイカれ研究者の実験に巻き込まれて気が付いたらこの施設にいたと言い、三日月に此処が別世界である可能性を言った。その時、突然爆発音が聞こえてきたのだった……

これは、三日月と別世界から来た青年が世界を救う長い旅である。

※前のスーパードット大戦Vのリメイク版です。

# 目次

序章	〜三日月と竜牙	1
第1話	〜復活の悪魔を冠するガンダム達	5
第2話	〜木星へ	11
第3話	〜流星の記憶	17
第4話	〜流星の記憶	22
第5話	〜アヌビス	27
第6話	〜アヌビス	33
第7話	〜再会	36
第8話	〜黒き機械天使	40
第9話	〜無人島での出逢い	50



## 序章く三日月と竜牙く

「……………此処……………何処だろ？」

「お？目が覚めたみたいだな」

何処かの部屋。その部屋にて一人の少年が目覚め、その少年が寝ていたベッドの隣にあるソファーに座っていた青年が話し掛けてきた。

「あんたは？」

「俺か？俺は竜牙、流竜牙だ。お前は？」

「三日月、三日月・オーガス。ところで此処は何処なの？」

そう三日月は起き上がりジャケットのポケットから火星ヤシを取りだして食べて竜牙に聞く。

「何処かの地下施設らしいが俺もよく分からないんだよな。そういや、なんで三日月は此処にいたんだ？」

「分かんない。俺、鉄血団の皆を逃がすために昭弘と一緒に殿をしてその後、目の前が真っ黒になって気が付いたらこのベッドに寝てた。竜牙は？」

「俺は……………所属している研究所のイカれ研究者の実験に巻き込まれてこの施設にいた

……あの腐れジジイ……戻れたら覚えてろよ……っ！」

そう言つて竜牙は顔に怒りマークを付けながら拳を握り締めていた。その時、三日月は竜牙を見てある事に気が付いた。

「あれ？竜牙のその右腕と左目って……」

「ん？ああこいつか？まあ昔戦いで仲間を庇つた時に右腕と左目を持つてかれてな。だから義手と義眼で代用しているんだよ」

「ふーん……」

「さて、とりあえずこの施設を探索するかね。行こうぜ」

「分かった」

そう三日月に言い、竜牙は三日月と共に部屋から出て施設を探索する事にした。

（あれ？そういえば何で俺、普通に歩けるんだろ？それに右腕動くし、右目もはつきり見えるけど……まあ良いや）

☆

部屋を出てから数分後、二人は施設の格納庫ブロックに着いていた。そこには巨大な扉がありその扉には笛のようなマークが描かれていた。

「このマーク……チヨコの人に乗ってた奴の肩のマークだ」

「チヨコの人？誰だよそれ？まあちよつと待ってる。今この扉のロック解除するから……」

ピー！ガシャン！ウーン……

「これは……！」

「……ッ!!」

扉を開き、その中を見た二人は驚愕した。そこには膝を着けた状態で静止している二機の機体があった。その二機はどちらも同じ機種であるが、それぞれの機体の装甲と装備が違っていた。

「……ガンダム・バルバトスルプス」

「バルバトスルプス？そっちの機体の名前か？」

「うん、俺が乗ってたモビルスーツ。でもそっちのモビルスーツはチヨコの人に乗ってたモビルスーツ」

「確かに、そのバルバトスルプスと違って何かこいつは変わった奴だな」

そう言つて竜牙は白と青の外装の機体のコックピットに座り、手元の端末でデータを確認していた。三日月もバルバトスルプスのコックピットに座り、懐かしむように触っていた。

「三日月、今この施設の情報をこの機体『ガンダム・バエル』を通して確認したんだが……」

「どうだったの？」

「どうやら、此処は俺の世界でも、三日月のいた世界でもないみたいだ」

「?どういう事？」

「まあ簡単に言えば平行世界って奴だ」

そう言つて竜牙は三日月に説明するが、三日月はいまいち理解していなく首を傾げていた。

「平行世界?よく分かんないや」

「おいおい………ひ」

ドガァーン!!

「!?!」

三日月の言葉に竜牙は苦笑していたその時、突然爆発音が格納庫内に響き渡つたのだつた……

次回に続く!



## 第1話く復活の悪魔を冠するガンダム達く

突然の爆発音に二人は驚愕し始める。竜牙はガンダムバエルから降りて機体の側にあった端末を操作する。

「この爆発音は……地上の方か！」

「どうなってるの?」

「どうやら地上で戦闘が起きているみたいだ。てか、此処って火星だったのかよ」

「……ねえ、どうすれば良い竜牙?」

そうやって三日月は竜牙に聞く。三日月は竜牙を見てかつて自分に進むべき道を教えてくれた男『オルガ・イツカ』と重ねていた。

「そうだな、とりあえず……この戦闘に介入するぞ。ちようど、機体もあるんだしだ！」

「うん、竜牙がそう言うなら俺もそうするよ」

「とにもかくにも、使える武装を持っていくぜ。こんなには有るんだしな」

そうやって竜牙は、バエルに乗り込み機体を立ち上げて右腕の義手を通して神経リンクをし、使える武装を装備されていく。三日月も着ていたジャケットを脱ぎ、背中にあ  
る戦闘用インターフェース《阿頼耶識》のコネクターをコックピットの端子に接続して

乗り込み、三日月もまた慣れ親しんだ武装を装備されていく。

「んじや、行こうかバルバトス！」

「よろしく頼むぜ、バエル！」

そう言つて二人は機体のレバーを握つた。それに答えるかのように二機のツインア  
イが強く光輝いた。

「とりあえず、どうやって地上に出ますかね……」

ドガアン!!

「……はい？」

竜牙がどうやって地上に出るか考えようとしていたその後、三日月の乗るガンダムバ  
ルバトスルプスは飛び上がり、格納庫の天井を手に持ったソードメイスでぶち抜いて外  
に出ていく。

「ちよっ!?!普通格納庫の天井ぶち抜いて行くかよ!?!」

竜牙は慌ててガンダムバエルを動かして三日月の開けた穴から地上に出る。そして  
先に出ていた三日月の隣に降り立つと目の前に巨大な戦艦が飛んでいた。

『うわあ……イサリビ以外にもあんな船があるんだ』

「アレって戦艦大和? いや、普通大和ってあんな飛ばねえよな?」

そう言っていると、向こうから10機のゴークルのような顔をしたモビルスーツが手

に持ったビームライフルを撃ちながら向かって来た。

「とりあえずあいつらを片付けるぞ！」

『了解！』

そう言つて二人は動き出す。竜牙は背部の翼状のスラスタに内蔵されている電磁砲で牽制し、三日月が人外染みた軌道で近づき、ソードメイスで一機目を叩き潰す。一機目が倒された事に戸惑つて止まっていた三機を竜牙はバエル・ソードで切り裂き、更には電磁砲を連射して更に二機撃ち落とす。三日月も両腕の200mm砲を撃ちながら近づきコックピットに腕を突き刺して振り込む。後ろから二機目が近付いてきた。

『あ、そういうえば背中の人無いんだった』

そう言つて三日月はバックパックのサブアームを起動してコックピットを潰し、更にはソードメイスでまとめてに二機を叩き潰す。

「凄い機動力だなこのガンダムバエルつて奴。反応速度が段違いだ。てか、三日月の戦い方は結構えげつないな」

『終わったよ竜牙』

「そうみたいだな。さて、この後どうするかね」

そう言つてコックピットの中で腕を組んで考えているとガンダムバエルに大和似の戦艦から通信が掛かつてきた。

「ん？あの戦艦からか？」

『そちらのモビルスーツ二機、協力感謝します。出来れば事情を聞きたいのでこちらに来ていただけませんか？』

「こつちも聞きたい事があるから手間が省ける。了解した。三日月も良いな？」

『うん、分かった。けど……』

「ん？」

『何かバルバトスが動かなくなったみたい』

「……ハアアー!!」

☆

あの後、動かなくなったバルバトスルプスを戦艦に運び終えて降りた二人は応接室にて責任者と話していた。そこでは宇宙海賊クロスボーン・バンガードのトビア・アロナクスから現状を宇宙戦争ヤマトの戦術長の古代進に話しているところだった。

(しかし、まさか此処が火星だったとはな。現在の地球がガミラスっていう奴等のせいで滅亡の危機になってるわ、更にはトビアって奴が壊滅させた筈の木星帝国って奴等がまた動き出すとか、完全に目茶苦茶な世界だぜ)

「さて、確か流竜牙君と三日月・オーガス君だったか？君達の事について聞きたいんだが」

「そうだな、まず最初に言うのと俺と三日月はこの世界の人間じゃない」

「何？この世界だつて？どういう事なんだ？」

「平行世界、似ているようで似て非なる世界の事だ。俺と三日月はそれぞれ別世界からこの世界にやって来たんだ。俺は…とあるイカれ研究者の実験に巻き込まれてしまつたんだがな」

「そ、そうなのか。じゃあ三日月君も竜牙君と同じか？」

「俺はよく分からないんだ。最後にコックピットを破壊されて外が見えた瞬間、目の前が真っ黒になつて気が付いたらあの施設に寝てた」

三日月はそう言つて火星ヤシを食べながら言う。三日月も自分が何故生きていてあの施設に寝ていて尚且つ、身体が元に戻っているのかが分からないでいた。

「そうなのか。にわかには信じ難い話だな」

「かもな。だが、実際俺の世界じゃ平行世界の行き来は出来ていたからな」

「そうなのか」

「なあ、ちよつと良いかな？君達の乗っていたあのモビルスーツはいったい何なんだ？あんなタイプのモビルスーツは初めてなんだけど？」

「ガンダム・バルバトスルプス」

「ガンダム・バルバトスルプス？」

「三日月の乗ってたモビルスーツの名前みたいだ。ちなみに俺が乗ってたのはガンダム・バエルって名前だ。詳しい事はあの施設から抜き取ったデータを見ないと分からないな」

「そうか、それじゃ二人はどうする？もし、俺達の旅に同行するなら艦長には俺から進言するが？」

「ならお願いする。どうせ簡単に帰れそうにないしな。三日月は？」

「俺も協力する。行く宛もないし」

「そうか、ならよろしく頼む」

「こちらこそ頼むぜ」

そう言つて竜牙は古代と握手するのだった……これが二人の長い旅の始まりでもあったのだ……

次回に続く！

## 第2話く木星へく

二人がヤマトの一員になった後、竜牙はヤマトの乗員達と共にバルバトスとバエルがあつた地下施設から予備パーツや武器に二機の装甲に使われているとされる塗料や弾薬等の資財をヤマトに積み込みトビア達と共に木星へと向かつていた。三日月はヤマトの戦闘員とシユミレーターで訓練し、竜牙はヤマトの格納庫でバエルとは違うモバイルスーツのOSを調整していた。

「……よし、こいつで大丈夫だな。しかし、まさかあの二機以外にももう一つあるなんてな」

そう言つて竜牙はコックピットから降りて調整し終えたモバイルスーツ《シユヴァルベグレイズ》を見る。このシユヴァルベグレイズもあの施設にあつた機体で左腕にワイヤークローが装備されており、肩や脚等にスラストターが増設された機体だった。

「お疲れ様竜牙君」

「ん？ ああ、チトセカ」

そう言つて竜牙は無重力により浮遊して飛んできた女性《如月千歳》を受け止める。千歳はヤマトの一員で特殊な機体《ヴァングレイ》のパイロットである。

「それでどうなのこのモビルスーツ？」

「OSは調整が終わったから誰でも使えるぜ。後、このモビルスーツ達の機関部に使われているエイハブ・リアクターって奴の改良も施しておいた」

「改良？」

「あの施設から抜き取ったデータにコイツらの機関部から精製させるエイハブ粒子によるエイハブ・ウェーブの影響で有線やレーザー通信以外の電気利用器具が使えなくなるみたいなんだな、だから資財の中にあつた火星ハーフメタルって奴を加工して三機の機関部の周りに取り付けてみた。これでもし市街地何かで戦闘しても影響がない筈だ」

「そう言つて竜牙はチトセに端末機に写された凶面を見せる。チトセは竜牙の手際に驚く。」

「凄い……竜牙君って機体とかも弄れるんだ」

「研究所じゃテストパイロットと整備士をしていたからな。こうした機関部問題もある程度は何とか出来る。まあ俺が使つていた機体とは扱いが違うがな」

「そうなんだ」

「てか、バルバトスとはかくバエルを造つた奴バカだろ。武器がバエル・ソードと電磁砲だけってないだろ。それにバエルのリアクターの調整が全く出来てなかつたみたいだし次の出撃はシヴアルベグレイズを使うしかない」



「確かにそれだけじゃ厳しいわね」

そう言つてチトセは苦笑いをする。バエルは機動力こそバルバトスと同等だが武装が圧倒的に少ないという欠点があるのだ。

「まあ幸いあの施設に大量の武装があつたから助かつたんだがな」

「もしかしてあの可変式ランチャーも？」

チトセはヤマトの整備員達が整備している大型のビーム砲を見ながら竜牙に聞く。

「ストライクカノンか？一応はバエルとバルバトスで使う事にしてる。データによると実弾とビームの2モードに切り替えが出来て、最大出力で戦艦クラスの威力が出るらしくてな」

「そうなんだ」

「そういえば、チトセは確か三日月達とシュミレーターやつてなかつたか？」

「そうなんだけど、私……三日月と戦つて3分で負けちゃつたんだよね……」

「ああ……御愁傷様としか言えんわ」

竜牙も三日月の強さを見に染みているのでチトセの心境を理解していた。

「前にシュミレーターで戦つたけどあの強さはヤバイな。ギリギリ引き分けだったよ」

「竜牙君でギリギリかあ……三日月君つて本当に強いよね」

「聞いたら元の世界じゃ少年兵だったらしくて、生きていくためにずっと戦っていたみ

「たいだ」

「少年兵か……やっぱりどの世界でも変わらないんだね……」

チトセはそう言つて悲しい顔をして俯く。それを見た竜牙はチトセの頭に手を置き撫で始める。

「り、竜牙君……?」

「だったらさ、少しずつでもいいから三日月に教えていこうぜ。戦い以外の事とかさ」

「……うん!」

「さてと、んじゃこのシユヴァルベグレイズ、シユミレーターで使つてみるか?」  
「使つてみる!」

そう言つて竜牙はチトセと共にシユミレーターでシユヴァルベグレイズのテストをするのだった。

☆

くヤマト・食堂く

シユミレーターでの訓練を終えた三日月はトビアと古代と共に食堂で食事をして  
いた。

「それにしても、凄いな三日月は、シュミレーターであれだけの数値を出す人はでもそう  
そういないよ」

「そう?」

(竜牙君があのだ地下施設から抜き取ったデータによると、あの施設では人体強化による  
モビルスーツをナノマシンによる制御をするための研究所で、三日月君は元の世界で阿  
頼耶識システムという適合手術を三回受けたって言ってたが……正直あまり良い思い  
はしないな)

古代は三日月の背中にある阿頼耶識のピアスを見ながらそう思っていた。三日月の  
話を聞いた古代達からすれば阿頼耶識システムははつきりいえば禁忌の技術であり、十  
代前半の子供にしかナノマシンが定着しない上に適合する確率がかなり低いのだ。そ  
の事を知ったヤマトの技術長の真田志郎と技術科仕官で情報長の新見薫はこんな技術  
は存在してはいけないと強調するくらいであった。幸いにもその施設はガミラスの進  
行に伴い中止になっていたのだ。

(まさかガミラスが攻めてくる前に火星にこんな非人道的研究が行われていたなんて  
な)

「ん?どうしたの?」

「いや、何でもない」

「?」

(もう、三日月君のような子供は増えない事を祈りたい……)  
そう思いながら食事を再開する古代だった……

次回に続く!

### 第3話 流星の記憶 前半

木星圏内にワープで着いたヤマトはトビアの提案により木星帝国の基地の偵察する為に、トビア、千歳、三日月、竜牙の4名を向かわせたのだった。三日月のバルバトスルプスにクタン参型を装備させ、竜牙は赤いカラーリングに変更され改良されたシユヴァルベグレイズ改に乗り向かっていた。

「ねえ二人供」

『ん？何？』

『どうしたの三日月君？』

「さっきの自爆した奴が言ってたアムロ・レイってどんな奴なの？」

『俺も気になっていたんだが、何者なんだ？』

三日月はクタン参型に掴まっているトビアと千歳に聞き、同じくクタン参型に掴まっている竜牙も三日月と同じ質問をする。数分前に木星帝国の偵察隊を拘束し情報を得ようとするがその前に自爆したのだがその前に木星帝国兵が言ったアムロ・レイという人物が気になっていたのだ。

『アムロ・レイは百年近く前の伝説のエースパイロットよ。一年戦争時にRX-78ガ

ンダムを駆る白き流星で撃墜スコアは百機以上だったらしいわ』

『百機以上!?!とんでもないパイロットだな』

『そしてシャアの反乱のアクシズ・シヨックの中心にいたのもアムロ・レイって話よ。でも彼はMIA認定されているし、もし生きていてももう100歳以上なのよ』

「んじゃ、あの軍人のデタラメ?」

『もしくは……クローンの可能性があるかもな』

『それを確認する為にも急ごう!』

そう言って、トビア達は木星帝国の基地へと向かうのだった。

☆

木星圏に着いた4名は木星帝国の基地がある小惑星を視認する。三人はクタン参型から離れ、三日月もクタン参型から分離する。すると基地から数機のバタラが出てくる。

『ガンダムは今のところいませんね』

『とりあえずは一安心ね』

『油断大敵だぞチトセ。こうした場合絶対奴らは隠し玉を用意してるはずだ』

「三人供、来るよ！」

三日月が言った通りバタラがビームライフルを放って来る。4名は散開し各個撃破に移る。三日月はバルバトスルプスの圧倒的機動力で近付きバツクバツクのツインメイスを使いバタラを次々と殴り倒していく。竜牙はシユヴァルベグレイズ改の機動力を巧みに使いライフルでバタラを撃ち落とし、更にはワイヤークローを射出しバタラを拘束し引き寄せて至近距離からライフルで撃ち抜く。そして弾切れになったライフルを投げ捨て両腰に取り付けていたブレードを装備して近接戦闘をしていく。トビアと千歳もそれぞれの戦闘スタイルでバタラを撃ち落とし行く。

「……までは普通だけど……」

『ああ……ちよつと呆気ない気がっ!? 三人供! 避ける!』

『『え?』』

「っ!」

竜牙が叫んだ次の瞬間、四人を謎のモビルスーツの攻撃が襲う。

『は、速い!?!』

「今の感じ……何か前にも感じた奴に似てる」

『フハハハ!! 見たか海賊共! 我らがアマクサの力を!』

『オーブンチャンネルか』

『そのアマクサはアムロ・レイの戦闘データをインプットした人工脳と脊髄をある男から頂いた技術により完成させた機体だ!』

「もしかして……三人供、気を付けて。もしかしたらあの機体……阿頼耶識システムが使われているかも」

『阿頼耶識システムだと!?!それって三日月の背中にある奴だよな!?!……まさか、あのガンダムモドキは!』

『人工脳と脊髄だけ取り付けられた阿頼耶識システム搭載型モビルスーツ?!』  
『そ、そんな……!?!』

三日月の言葉に竜牙達は驚愕していた。あのアマクサというモビルスーツには人工的に造った脳と脊髄だけをコクピットに取り付けられた阿頼耶識システム搭載型モビルスーツであり、その人工脳にはアムロ・レイの戦闘データがインプットされているのだ。

『テメェら……っ!そんな事が許されると思っっているのか!?!』

『知った事ではない!貴様らを倒せるなら何でも使う!それにいくらでも代えの人工脳はあるのだからな!』

『この……下衆共があ!!』

木星帝国兵の言葉に怒りを露にした竜牙はアマクサに向かってブレードを振るうが



まるで生身のような動きで避け、そのまま蹴りを入れた。

『がぁ!?!』

『竜牙君!!』

千歳は急いで援護をするが、アマクサは素早い動きで避け、背後に回り込み手に持ったビームライフルで背中を撃つ。

『キャアアア!?!』

「竜牙!千歳!」

『な、何て動きだ!これが、阿頼耶識システムの力なのか!?!』

「やっぱりあの時の黒いグレイズと同じ奴だ!」

三日月はかつて、エドモンソンでの戦いで戦った黒いグレイズを思い出しで顔をしかめる。四人は最大のピンチに陥ってしまうのだった……

く後半に続く!く

## 第4話～流星の記憶～後半

阿頼耶識システム搭載型モバイルスーツのアマクサにより四人は最大のピンチに陥っていた。阿頼耶識システムによる圧倒的な機動力により四人の機体は徐々にダメージを負っていた。

「ちっ……やっぱりあの黒い奴同じで厄介だ」

『確かに、実際に阿頼耶識と戦うところも厄介なんてな』

『なんとかあの機体の動きを止められたら……』

そう言っつて何とかしようとした時、アマクサはシールドに内臓されていたハイパーハンマーを千歳のヴァングレイに向けて射出する。

『っ！』

『チトセ!!』

いち早く気付いた竜牙が千歳を庇い、ハイパーハンマーがシュヴァルベグレイズ改を左腕を砕く。竜牙は直ぐ様破損した左腕をパージする。

『グッ!?!』

『竜牙君!?!』

『大丈夫ですか!?!』

『かすり傷だし左腕を持ってかれたが何とかな。だが、あの機体をどうにか倒さないと』

「……みんな、アイツは俺に任せて」

そう言つて三日月はアマクサの方を向く。そして三日月はバルバトスにある物を外そうとする。

『まさか……!?!三日月!!』

「おいバルバトス……余計な楔外してやるからお前の力を寄越せ」

三日月のやろうとする事に気付いた竜牙は叫ぶがそれよりも早く三日月はバルバトスルプスの枷を外す。するとバルバトスルプスのツインアイが緑から赤に変わりそしてリアクターから獣のような機械音がなり始めた。しかし、この時三日月はある違和感を感じていた。

(あれ? 何時もなら鼻血とか血涙とか出るのに何か頭が痛いだけだ)

「まあ良いや……んじや行こうか!!」

そう言つて三日月は動き出す。その動きは先程のバルバトスルプスを軽く凌駕していた。アマクサはバルバトスルプスに向けてまたハイパーハンマーを射出するがそれをツインメイスを使い弾く。

『何あれ？さっきまでのバルバトスルプスと動きが違う……』

『あの馬鹿、バルバトスルプスのリミッターを外しやがって』

『リミッター？』

トビアはリミッターについて聞こうとした時、木星帝国の増援が現れる。

『今はあの増援をどうにかするぞ！』

『でも三日月君が！』

『三日月は大丈夫だ……少なくとも、あの状態になったバルバトスルプスはな……』

そう言つて竜牙は近くにあつたバタラのビームライフルを掴み使い始める。それに続くように二人も動き出す。

☆

ハイパーハンマーを弾いた三日月はそのままアマクサに向かいツインメイスを振るうがアマクサはシールドのクローを使いバルバトスルプスの右腕を挟む。

「うざったい……なあ!!」

そう言つて三日月は空いていた左腕の方のメイスを離してアマクサの顔を殴り飛ばす。殴り飛ばされたアマクサは右目部分が破損し、その際にクローを離す。三日月は残

りのメイスを投げ捨ててそのままアマクサの右腕を掴み千切った。更には左腕も千切り、そしてその腕に付いていたシールドを突き刺した。アマクサは最後の足掻きで頭部のバルカン砲をバルバトスルプスに向けて放つがバルバトスルプスのナノラミネートアーマーの前には何のダメージも与えられなかった。

「お前……もうくたばれよ」

そして、三日月はアマクサに右腕を突き刺しコクピット部分を抉り出してそのまま握り潰した。アマクサが動かなくなった瞬間、バルバトスルプスのツインアイの色が赤から緑に戻る。すると戦いを終えた竜牙が近づいてきた。

『終わったか?』

「何とかね。でも何か頭が痛い……」

『その程度で済んだだけありがたいと思いやがれ。ほら、丁度ヤマトが来ているから運んでやるよ』

「ありがとう竜牙」

『礼は良いが、帰ったら真田さんと佐渡さん辺からの説教が待ってるからな』

「ええ……やだなあ……」

そう言つて三日月は嫌がるのだった。そして案の定、ヤマトにて千歳に泣き付かれ、更には真田と佐渡からの説教コースを受ける事になったのだった……

次回に続く！

## 第5話くアヌビスく上編

あの戦いの後、木星にあるガミラスの浮遊大陸へ攻撃を開始したヤマト。この戦いは竜牙と三日月は参加していない。理由は竜牙は先の戦いで負傷、三日月はバルバトスルプスのリミッター解除の後遺症の危険性を考慮して沖田艦長が待機を命じたのだ。そして浮遊大陸での戦いはヤマトの波動砲により幕を閉じ、現在ヤマトは新たに仲間になったキンケドウ・ナウとベルナデット・ブリエツトと共に再びイスカandalへ目指していた。

「よし、やっとリアクターの調整と俺に合わせたカラー変更と換装は完了だな」

怪我が治った竜牙は格納庫でバエルの最終調整を完了させていた。装甲も青い部分は赤色に変更されていた。武装も右腕には可変式ライフル《ストライクカノン》、両腰にはハンドガン、左腕にはナノラミネートアーマー仕様の盾《バエルシールド》が装備されておりその盾の裏側には太刀が取り付けられ、竜牙が持つて来ていたあるユニットを組み込み更にはバックパックを回収したアマクサの物を元からある可変式スラストターミナルと組み合わせて使い前のバエルより大幅強化されていた。バルバトスルプスも回収し

たアマクサのパーツを使い強化していた。三日月曰く、何か勿体無いとの事らしい。

「三日月がかなり派手に壊したからあんまり使えるパーツが無かったけど、背部バックパックとビームサーベル、シールドに付いてたハンマーが使えたからちよつと改良出来たな」

『しかし、出来たのは機動力強化と武装強化のみです。バエルは何とかなりアクター調整が完了しましたが武装も殆どが資材内にあつた物で補うしかできませんでした』

「武装に関しては仕方ないさ。それにお前を持って来ていたお陰でバエルの最終調整が早く終わったから問題ないさ」

『そうですね。それにあなたをお守りするようにと彼女に頼まれています』

「あいつ、何時の間にかそんなことを……まったく心配性なんだからなあ……」

『あなたが何時も無茶ばかりするからです』

「ウグツ……悪かったよ《エイダ》」

そう言つて竜牙は左腕に着けた腕時計型デバイスを通して言ってくるバエルに搭載した独立型戦闘支援ユニット《エイダ》に謝る。エイダは竜牙が元の世界にて本来の機体に搭載していたユニットであり竜牙の大切な相棒である。

『それよりも、お話しておきたい事があります』

「なんだ？」



『バエルのリアクター調整を行っていた際に機体のプログラム内を調べていたところ気になる物を発見しました』

「気になる物？」

『はい、バエルのフレームの素材に私達の世界の機体に使われているあの鉱物が使用されているみたいです』

「まさか……アレか？だが、何でバエルに……」

「ビーー！ビーー！」

「ー」

竜牙が疑問に思っていたその時、ヤマト全体にサイレンが鳴り響くのがあった。

☆

く???  
く

とある宙域、その宙域に一隻の艦と2機の機体があった。一機目は背部に2門のロングバレルの砲台があるピンク色の機体で頭部には目のペイメントがされていた。もう一機は薄いピンク色のカラーの機体だった。

『どうだシノ？何か反応はあったか？』

「今の所は何も反応ないぜ名瀬さん。しかし、本当に何処なんだ此処は？」  
『とりあえず、火星付近じゃないのは確かだね』

強襲艦ハンマーヘッドの艦長《名瀬・タービン》と名瀬の妻であり百鍊のパイロット《アミダ・アルカ》はピンク色の機体『4代目流星号（ガンダムフラウロス）』のパイロット《ノルバ・シノ》に言う。彼等も三日月同様、本来は死んだ筈だったのだがどういう訳か何故かこの宇宙に機体共々いたのだ。

「何で俺や名瀬さん達が生きてんのか分かんないぜ。あの時俺はアリアンロット艦隊に突っ込んで死んだ筈なんだけど……」

『俺やアミダもラフタ達を守って死んだ筈なんだがな』

『本当にどうなってるんだかね』

ビーー！ビーー！

話していたその時、突然サイレンが鳴り響く。そして次の瞬間、空間を裂くようにに謎の機体が腕を組んで現れる。更にその回りに鳥の頭を思わせる細い身体をした機体が次々と現れる。

「な、何だコイツら!?!何も無い所から突然現れやがった!」

『ほお……次元カタパルトの試運転の為にこの世界に転移したが、丁度良い……貴様らでこのアヌビスとラプターの性能実験をしてやる』

謎の機体はそう言って回りにいた鳥頭の機体をシノ達に向かわせる。シノ達も追撃を開始した。シノは手にもったナイフとバツクパツクのロングバレルのレールガンを使い鳥頭の機体を破壊していき、アミダも百鍊のライフルとサーベルを駆使していき破壊していく。そしてすべての機体を破壊した二機を謎の機体が突然側に現れ何処からか出現させたランスで突き飛ばした。

「ぐわあ!？」

『くう!？』

『アミダー！シノ！』

『中々やるじゃないか。だが、その程度でこのアヌビスと相手は勤まらんよ』

そう言って、謎の機体はそのままドメをさそうとしたその瞬間、何処からかビームが飛んできて謎の機体の背中に当たった。

『何?』

「い、一体何が……?？」

『……ふ、フハハハハ！まさか……貴様がこの世界にいるとはな……流の息子よ!』

そう言って謎の機体はビームが飛んできた方を見た。そこにはストライクカノンを構えた新しい姿のパエル《ガンダム・パエルスターダスト》がいた。

く  
次回  
に  
続  
く  
！  
く

## 第6話くアヌビスく後編

「……まさか、あんたが生きているなんてな……リドリリー・ハーデイマン！」

『ふふふ……君には分かるか。そうだろうな、四年前……私と戦った君なら私の事に気付くと分かっていた。しかし、今の私の名前はノウマンだ』

謎の反応を感じして一人先行した竜牙は謎の機体に乗っているパイロットに言う。

「お前は四年前の事件で死んだ筈だ」

『その筈だったが、こうやって別次元の世界で生き返ってな』

「……お前が何で生き返ったなんてどうでも良い……だが、此処でお前を倒す！」

そう言つて竜牙はストライクカノンを腰にマウントしてバエルシールドから太刀を抜きノウマンに突撃する。ノウマンもランスを使い太刀を防ぐ。

『機体コードが分かりました。あの機体はオービタルフレーム《アヌビス》です』

「アヌビスだと？ 確か一年前に開発中に行方が分からなくなつたオービタルフレームだよな？」

『はい、データにはそのようになっています』

「なるほど、つまりは一年前に開発中だったアヌビスを拾つた訳か！」

『その通り。偶々私がいた世界に流れ着いていたこの機体を完成された訳だ』

そう言ってノウマンは切り払いホーミングレーザーを竜牙に放つ。竜牙は太刀をバエルシールドに直しハンドガンを両手に持ち、左右から飛んでくるホーミングレーザーをガンⅡガタの動きのように撃ち落としていく。そして、そのままアヌビスに向かって撃ち込むがアヌビスは突然消える。

「何!？」

『はあー!』

消えたアヌビスが竜牙の後ろに現れてランスを降り下ろす。咄嗟にハンドガンでガードする。

「どうなってるんだ! 突然消える上に何時の間にも後ろに現れやがった!」

『恐らくはベクタートラップを用いた亜光速移動かと思われます』

「おいおい、それじゃアヌビスはウーレンベック・カタパルトの力を応用した能力が使えるのかよ!」

そう言って押し返して再びハンドガンで攻撃するがまた亜光速移動で回避された後ろから攻撃され竜牙はギリギリ避ける。

「クソ、やばすぎるだろあの能力!」

『そのアヌビスの力に食い付いて来ている君はやはり私の好敵手に相応しい』

「そりやどうも!!」

そう言つて後ろから攻撃しようとしたアヌビスに回し蹴りをして阻止してハンドガンを撃つ。その攻撃は何発かは命中して少しだけダメージを与える。

『ほう、もう対応して来たか……』

「感頼りだがな!三日月!!」

そう言つて竜牙が叫んだ瞬間、アヌビスの後ろから三日月の改良された『ガンダムバルバトスルプスⅡ』がソードメイスを降り下ろしアヌビスを吹き飛ばす。

『っ!仲間がいたか』

『ちっ……今のは浅かったか……』

「さてどうするノウマン?いくらお前でも2対1は分が悪いんじゃないか?」

『……ふ。そのようだな』

そう言つてノウマンは武器を仕舞い腕を組むとアヌビスを謎の光が包み込む。

「まさか、次元カタパルトか!」

『また会おう。次は此方側の世界でな』

そう言つてノウマンは消えて行つた……

次回に続く!

## 第7話～再会～

アヌビスとの後、ヤマトと合流した竜牙達。名瀬は沖田艦長達と状況説明をする為にヤマトに行き、竜牙はハンマーヘッドと百鍊とフラウロスのリアクター改修をしていた。更にハンマーヘッドの改良作業をしていた。

「しかし、こうやって三日月と再会出来るなんてな」

「うん、俺もシノと再会出来て嬉しいよ」

ハンマーヘッド艦内にて三日月とシノはドリンクを飲みながら再会を喜んでいた。

「にしても、まさか別の世界に飛ばされるって事が本当にあるとはな。まあ難しい話はわっかんねえがよ」

「竜牙が言うには平行世界？ってらしいよ」

そう言つて三日月は外でシュヴァルブレイズを使つて改良作業を終えてハンマーヘッドに着艦している竜牙を見る。そして数分後、ドリンクを持った竜牙とアミダが三日月達の所にやつて来た。

「お疲れ様、改修と改良作業は終わった？」

「フラウロス「4代目流星号だ！」……4代目流星号以外は全て完了した。ハンマーヘッ



ドはヤマトにあつた連邦軍の船のデータで大気圏の飛行が可能、後はガミラスの船の残骸にあつたパーツを使ってワープも使えるようにしたぜ」

「本当にウチの整備士が見たら驚くよ。まさかほんの数時間で作業を終わらすなんて……」

「なあなあ！俺の4代目流星号はまだ終わらねえんのか？」

「流星号はまだ掛かるよ。各部のパーツを新品に変えたがノウマンの攻撃でリアクターに不具合が起きてるから再調整にちよつと掛かる。その代わりにバツクパツクのレールガンを改良してヤマトの三式融合弾とショックカノンを使えるようにしとくさ。アミダさんの百鍊はバタラのビームライフルとビームサーベルにナノラミネート仕様のシールドと両脚にミサイルポットとX-1のスクリューウィップを追加しといたぜ」

そう言つて二人に詳細を書いた電子端末を渡し、二人はそれに目を通す。

「驚いたね。私の百鍊、元の世界の百鍊よりかなり性能が上がってる」

「すげえなお前！」

「こんぐらいなら朝飯前だよ。まあ本業はパイロットなんだがな」

そう言つて竜牙がドリンクを飲むと話し合いを終えた名瀬がやつて来た。

「お帰り名瀬」

「ただいま、これからの方針だがこのままヤマトに付いていく事になった。向こうじゃ

もう死亡扱いになつてゐるし地球を救うつても悪くないって思ったしな」

「私はあるのに付いていくよ」

「俺もだぜ名瀬さん！」

そう賛同する二人を見ていた時、ふと名瀬は竜牙の方を向いた。

「そういや、お前つて確か竜牙つて名前か？」

「ん？そうだがなんで名前を知つてるんだ？」

「いや、実はお前達に助けられる前に宇宙を漂つてた機体を拾つてな。んで助けたパイロットがなんかお前を探しているつて話してたんだよ。今そのパイロットは医務室で休んでいるがな」

「機体？それつてどんな奴だ？」

「確か……こんな奴だな」

そう言つて名瀬はその機体の画像を載せた端末を渡しそれを見た竜牙は驚いた顔をした。

「こいつは『ドロレス』!?ま、まさか！」

そう言つて竜牙は急いで医務室に走りだし、名瀬達も後を追う。そして医務室に着いた竜牙は慌てて中に入った。

「あーアミダさん？どうしたん……ですか……っ！」

「や、やっぱりお前だったのか……《イオン》！」  
「り……竜牙君!!」

そう言ってイオンと呼ばれた少女は竜牙に抱き付き、後に到着した名瀬達はどういう状況か全く分からなかったのだった。

～次回に続く!～

## 第8話～黒き機械天使～

あの後、落ちついた少女は竜牙達と共に格納デッキに来ていた。

「改めて自己紹介するね。私はイオナサル・ククルル・プリシエール。竜牙君と同じ部隊に所属してるの。イオンって呼んでね」

「俺は三日月・オーガス。よろしく」

「うん、よろしくね三日月君」

「それにしてもよくこっちの世界に来れたな。いくら次元カタパルトでもオービタル・フレイムで行けないんじゃない？」

「それに関しては新型のスタビライザーを装備させて……そうだった!? た、大変なの竜牙君! ドロレスが動かなくなったの!」

「動かなくなったあ〜? ……はあ……」

竜牙はため息を吐くとドロレスと呼ばれる機体の頭部に近付く。

「竜牙?」

「何する気なんだあいつ?」

「スウ……ハア………起きろドロレス!!」

ガアン!!

「ちよっ!?!」

そう叫んで竜牙はドロレスの頭部を思いつきりぶん殴った。突然ぶん殴った竜牙に名瀬達は驚いた。

『い、痛ったあい!お兄様!いくらなんでも殴る事はないじゃないですかあ!』

「やかましい!こうでもしないと起きねえだろうが!唯でさえお前はイオン用の特殊な機体なのに……」

「……なあお前ら……あの機体……誰も乗ってないのに勝手に動いてないか?」

「動いてるねえ……」

「動いてるよな」

「へえー、何か凄いな」

「いや、そこじゃないだろ」

名瀬達は勝手に動き出したドロレスに驚いていた。動いてくれたドロレスにイオンは心配した顔で近付く。

「良かったあ!心配したんだよドロレス!」

『ご心配をお掛けしましたイオンお姉様。そして無事だったんですねお兄様!心配していただきますよ』

「心配かけたな二人共。まあ原因のあの馬鹿爺のせいなんだがな」

『あ！その敷島博士ですが、竜馬おじ様と千冬おば様達がお置ききされてましたよ』

「親父と母さん、ナイス！」

ドロレスがそう言うのと竜牙は元の世界にいる父親達に感謝した。

「なあ、その機体どうなってるだ？なんで誰も乗ってないのに動ける上に喋っているんだよ？」

「ん？ああ、こいつはオービタル・フレーム《ドロレス》。イオン用に作られた試作機でまあ……あれだ……動く理由は俺にも分かんない」

「……はあ!?!」

「だって、完成間近でエイダと同型のAIを積んだらどういう訳か勝手に色んなネットワークやデータとかで学習するし自己進化して自立化するのわかって意味分かんない事になってたんだよ。一体何が原因なんだか……」

そう言つて竜牙は顎に手を添えて回想で組み立て作業を思い出す。コックピットにAIを組み込み作業をしている傍らに敷島博士が何か妙なプログラムを不気味な笑みを浮かべながら入っていた。

「「イヤイヤイヤ!?!100%その爺さんが原因だろ!?!」」

「あ、やつぱり?」

「私もそう思うかも……」

三人が竜牙にツツコミを入れてイオンは否定できないのか苦笑いをした。そんな時だった。

「っ！」

「竜牙君？三日月君？」

「三日月……感じたか？」

「うん、何か妙な気配がする」

ビー……ビー……ビー……

《この空間に転移する反応を感知》

「やっぱりか！出るぞ三日月！」

「分かった！」

そう言つて二人は自身の愛機に乗り込み出撃する。今回は三日月のバルバトスルプスⅡにはランサーメイスを装備し、竜牙のバエルスターダストはストライクカノンとシールドは外し何時ものバエルソードを両手に装備させていた。

「ヤマトとハンマーヘッドは先に行つてくれ！」

『だが、そうしたら君達が!?!』

「いざとなつたらガミラスの船を直して追いつける！良いから行け！」

『……分かった！気を付けろよ二人共！』

『私も残るよ！』

そう言つてハンマーヘッドからドロレスに乗ったイオンが出てきた。

『イオナサル君!?!』

『ドロレスには新型のスタビライザーが装備させています。それを使えば二機と共にワープで追い掛ける事が可能です！』

『俺も残るぜ！』

更には、ハンマーヘッドからシユヴァルベグレイズ改に乗ったシノが出てきた。

『シノ!?!』

『四代目流星号じゃねえが、ダチを見捨ててなんてできないからよ！』

『竜牙君!』

「心配するなチトセ。ちゃんと生きて戻つて来るからよ」

そう竜牙はチトセに安心させるように言う。そして、少し不安そうにするが決意した。

『分かった……必ず……帰つて来てね!』

「ああ!」

(あのチトセつて人……もしかして……?)



そう言つてヤマトとハンマーヘッドを見送つた後、気を引き締める。そして、空間に穴が空きそこから二機の黒い天使を思わせる見たことのない機体が現れた。

「なんだあの機体……エイダ？」

『該当するデータ無し。見たことのない機種です』

『どうする？』

そう言つて三日月は聞いた瞬間、二機の黒い機体は手に持ったビームライフルで竜牙達に攻撃してきた。

「攻撃してきたから敵だ！俺とイオンは片方を、もう片方は三日月とシノだ！」

『了解！』

☆

く竜牙&イオン視点く

黒い機体はビームライフルで牽制しながら剣で竜牙に切りかかるが竜牙は持ち前の機動力で避け、そしてイオンがホーミング・レーザーで黒い機体を牽制する。

『私達が動きを止める！』

《お任せください！》

「任せる！」

イオンはもう一度ホーミング・レーザーを放ち黒い機体を牽制し、そして腕をブレードに変えて黒い機体を切る。

『竜牙君！』

「サンキューイオン！トドメは俺が！」

そう言つて驚異的な加速で黒い機体に近づき、バエルソードでコックピット部分を突き刺した。

「ん？何か妙な違和感が……」

そう言つて竜牙は動きが止まった黒い機体のコックピット部分の装甲を引き剥がした。

「ッ!?なんだと!?!」

☆

く三日月&シノ視点く

一方、三日月&シノペアはというと黒い機体を一方的に攻撃しまくっていた。

『オラオラあ!!足が止まってんぜ!』

「フッ！」

シノの乗ったシユヴァアルベグレイズ改が二本のバトルアックスで黒い機体を切り、三日月のバルバトスルプスⅡがランサーメイスを巧みに使い黒い機体に叩き付ける。そして、トドメにランサーメイスを投げ、それが黒い機体を貫く。

『意外と苦戦しなかったな三日月』

「……なんだろう」

『あん？どうした？』

「手応えが無さすぎる」

そう言つて三日月は突き刺したまんま黒い機体を竜牙達の所に運び始めたのだった。

☆

合流した二人は竜牙から驚きの事実を聞いた。竜牙達が倒した機体には誰も乗っていない事が分かったのだった。

『マジかよ。まさか誰も乗っていない機体だったのかよ』

『通りで手応えが無さすぎたんだ』

『これって一体……？』

「さあな。俺にも何が何だ……ッ!？」

その時、突然回りの空間が歪み始めた。竜牙はこの感覚に見覚えがあった。

「これは、次元転移現象!？」

『な、何だこりや!？』

『ッ!？』

『ま、まさか……跳ばされる!？』

キュイイイイン!!

『『『『うわあああ(キヤアアア)!!』』』』

そして、その瞬間……四人は次元の渦に吞まれてしまうのだった……

☆

く???視点く

「フフフ……一応お膳立てはしたよ」

「ああ、感謝するぜ……これで……アイツを……」

「では、私の計画に協力してもらおうよ……」

「分かった……さあ……早く来やがれ……流竜牙!!」

次回に続く！

## 第9話～無人島での出会い～

～何処かの無人島～

「イオン？六番のレンチとポルト二本渡してくれ」

「はい。こっちのコードは二番に繋げる？」

「いや、そこは八番を経由して繋げないとバランスよくエネルギーが回らないぞ」

「あ、確かにそうだね。こっちにドライバーとネジ頂戴」

「……何か、暇だな」

「……そうだね」

あの後、どういう訳か竜牙達は無人島にいた。各々の機体から下りた四人は無人島を探索した。そしてその無人島に誰も使っていない破棄された軍施設を発見しそこに機体と一緒に転移してきた黒い機体と共に移していたのだ。それから2週間、現在竜牙とイオンは破損の少ない黒い機体をベースに別の三日月達が倒した機体の使えそうなパーツと島に流れ着いていた黒い機体と似たような残骸から使えそうな物を使って製作していた。

「どう二人共？」

「もうちよいだな」

「ごめんね二人共。わざわざ私の為に機体を作ってくれて……」

「気にしないで、ナオミちゃん。こうした作業は元の世界でもしていたから」

「まあ使っている技術は違うからちよつと手間どうがな」

そう竜牙とイオンはピンク色の髪をした少女「ナオミ」に言う。ナオミは1週間前に浜辺で倒れていた所を竜牙が保護し、そしてナオミからある程度のこの世界の事を聞き、そしてナオミの機体を作っていたのだ。

（この世界はマナと呼ばれる力を持つ者を人間、マナを持たない者をノーマと呼んで区別する社会……そしてそのノーマは人間扱いしないって……これは俺達の世界じゃ考えられない奴だな）

そう思いながらコックピットシートを固定する。そして、そのままOSを組み込み作業に入る。

「イオンは休んでも良いぞ。後はOSを組み込むだけだからな」  
「分かった。それじゃ私はナオミちゃんとお風呂入ってくるね」

そう言っつてイオンはナオミと一緒に風呂場に向かう。そして、シノがそろりと何処に行こうとした瞬間、シノの顔ギリギリをすり抜け壁にドライバーが突き刺さった。シノは顔を真っ青にしながら振り向くとOSの組み込み作業をしながら左腕を向けていた。

「覗きに行こうとしたら……どうなるか分かってるよな？」

「は、はい……すいません……」

そう言ってシノは素直に元の場所に戻り、竜牙はOSを組み込み終えた後、残っていたパーツを見ながら考えていた。

「さて、この残ったパーツは……バルバトスとバエルの強化に使いますかね」

そう言って竜牙はスパナやレンチを取り出してまた作業を開始し始めるのだった。

☆

く風呂場く

「うーん！気持ちいい♪」

「確かにそうだね。作業終わりのお風呂は最高だよお♪」

あの後、風呂場に来たイオンとナオミは気持ち良さそうに湯船に使っていた。

「今思ってたけど、イオンって綺麗だよな」

「そ、そうかな？」

「そうだよ。髪も綺麗で胸も大きいし……」

「そ、それを言ったらナオミちゃんも同じだよ」



「それでもだよ。あ！そういうえば、竜牙君と一緒に部隊にいたんだよね？」

「うん、わりと最近なんだけどね」

「最近？」

「実はね？私……竜牙君の世界とは別次元の人間なの」

「そう言うとなオミは驚いた顔をした。最初は竜牙と同じ世界だと思っていたら実はまた別世界の人間だったのだ。」

「昔ちよつとした出来事で竜牙が私のいた世界に来たの。それでね、竜牙は他人の私の為に傷付いたりしながらも私と私の世界を救ってしてくれたの」

「もしかして、その時に竜牙君の世界に来たの？」

「うん、最初は戸惑ったけど私を支えてくれた人達の後押しで付いていったの……」

「そう言うとなオンは湯を手で掬い上げて覗き込む。そして、顔を赤くしながら嬉しそうに笑う。」

「だから、私は……他人の為に優しく接してくれる竜牙君の事を……愛してるの」

「そっか……私も……イオンの気持ち分かるなあ……竜牙君……凄く優しく……か、格好いいし……」

「ナオミちゃん……もしかして、惚れちゃった？」

「……ふえ!？」

「やっぱり、本当に竜牙君は罪作りなんだから……もしかしたら三日月君もだけどね……」

そう言うといオンは苦笑いしながら顔を真っ赤にして慌てるナオミを見る。

「あ、いや、えつと!？」

「男の人に惚れたの初めて?」

「……うん」

「ねえ、ちよつと提案があるんだけど……」

そう言うといオンはナオミと話し合いをし始めたのだった。

「ぶえつくしよい!!……誰か俺の話してんのか?」

格納庫にてバルバトスルプスⅡとバエルスターダストの強化していた竜牙はくしやみをしながらまた作業を再開するのだった。

次回に続く!